

文学館だより

令和元年 7月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文 貴 日 高

たづね来て泊れる人をゆり起す夏めづらしき今朝の富士見よ

沼津市上香貫に転居（大正9年）後、詠まれている。『山桜の歌』収録 大正10年7月作

伊藤一彦短歌実作講座 今年も始まりました！

本文学館長 伊藤一彦先生を講師に開催している短歌実作講座（日向若山牧水顕彰会主催）の第1回が6月19日（水）、日向市中央公民館にて開催されました。



講評をする伊藤先生

短歌実作講座のながれ

講座前日まで

- ① 受講生は1週間前までに自作短歌を投稿します。
- ② 寄せられた短歌を一覧にし、受講生に届けます。
- ③ 受講生は講座開催日までに目を通しておきます。

講座当日

- ④ 1首ずつ鑑賞します。
 - ・伊藤先生が短歌を読みます。
 - ・（席順でひとりずつ）受講生がその短歌について感想を述べます。
 - ・全員で鑑賞し、意見感想を出し合います。
 - ・伊藤先生が講評します。
- ⑤ 2首目以降も同様に進行します。

講座に投稿された短歌より

膝小僧を呪(のろ)はれしごとドアに打ち呪(まじな)ひかけてまるく撫でやる

- 「呪」一字を「のろう」と「まじない」と読ませる工夫が見られる。
- 字余りでも「膝小僧を」と「を」を入れた方が膝小僧が強調されて効果的。
- 「まるく撫でやる」を「優しく」としなかったところが良い。

担当医(せんせい)は難病の予後説明す今できることこれからのこと

- 四句五句はシンプルだけど、味わいのある表現に仕上がっている。
- 「担当医(せんせい)」は当て字のふりがなを使用。これも良し。「担当医(たんとうい)」でも十分良い。

熱帯のデイゴは大きく枝伸ばし我家の庭を深紅に染める

- 全体が散文的なので、四句五句を入れ替えてみると良いのでは。



朽ちかけたトランペットのケースには出番何時(いつ)でもと輝き放つ

- 四句五句の表現が良い。

ダム底に姿あらわす沈下橋初夏の陽射しを浴びて乾きぬ

- 四句五句が丁寧な表現に仕上がっている。



平成18年に始まった短歌実作講座。14回目を迎えた今年も新しい受講生が加わり、たくさんの短歌と出会えることを楽しみにしています。

全首の鑑賞が終わるまで、受講生は作者を知りません。伊藤先生にも伝えてありません。純粋に短歌を味わうのです。伊藤先生を囲み、和気あいあいと感想を述べ合いながら短歌の作り方を学びます。

次回の講座は、7月17日（水）13:30から、日向市中央公民館にて開催予定です。興味のある方、お近くの方、見学にいらっしやいませんか。見学ご希望の方は文学館までご一報いただけると助かります。（TEL 68-9511）

伊藤一彦先生講話 — 若山牧水の添削 —

第1回短歌実作講座は、毎回伊藤先生の講話から始まります。今回のテーマは、『若山牧水の添削』でした。これは5月に東京で開催された講座と同様のもので、当然ながら東京でのチャンスを逃していましたから、興味津々の内容でした。

現代歌人協会 公開講座「ザ・巨匠の添削 若山牧水」
令和元年5月15日（水）
講師 伊藤一彦
司会 笹公人
会場 東京・学士会館



笹公人氏公式ページより

[原作] ^{はくそう}白鳥は哀し^{かな}からずや海の青そらのあきにも染まらずただよふ
[改作] ^{しらとり}白鳥は哀しからずや空の青海のあきにも染まらずただよふ

[原作] 「^{はくそう}白鳥」・・・当時の活字印刷はふりがなをつけるのが常で、そのまま印刷された。
[改作] 「^{しらとり}白鳥」と読ませ、大和言葉の響きを大切にした。他にも牧水は大和言葉を多く使用。
「空」と「海」とを逆転させることで、海に、より染まりたいことを表現している。

[原作] ^{やかた}蘇鉄の香る白亜の館にし^{はつあき}みじみと初秋を見る疲れし旅人(伊勢にて)
[改作] 伊勢の旅とある白亜の館のうちに繁る蘇鉄を見て過ぎにけり
[改作] ふと見たる白亜の館の大蘇鉄旅倦みし身に匂ふ秋の日

[原作] 「初秋を見る疲れし旅人」・・・概念でイメージがわきにくい。
[改作] 「繁る蘇鉄を見て過ぎにけり」として旅人を思わせ、余韻を残している。

[原作] ^{にほひ}ひとり居て電車のひびき聞きをればここだく淋し土の匂す
[改作] ひとりゐて電車のひびき聞き居ればかすかなるかも土の匂へる

[原作] 「ここだく淋し」・・・古いことばが歌に生きているか見極める。
[改作] 「かすかなるかも土の匂へる」とし、古語を削除して柔かい表現にしている。
[改作] 「ひとりゐて」「聞き居れば」とし、かなばかりの句、漢字交じりの句としている。

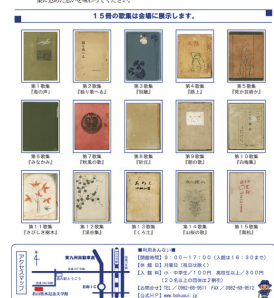
ほかにも原作1首から3首連作に改作されている例や、動詞の連体形を連用形に改作して動きを連想させている例など、さまざまなケースを紹介いただきました。推敲を重ね、より満足のいく作品に仕上げていく過程を聞き、牧水先生の意味、こだわりのようなものをかいま見たような気がしました。

私も数年前、初心者ながら短歌を詠み、伊藤先生に見ていただいたことがあります。亡父への思いを詠みましたが、「盛りだくさん過ぎる。この中からひとつを詠めばよい。連作にするとよい。」と先生から一喝。これも書きたい、あれも伝えたいと詠んだものですから、欲張りすぎたようです。

企画展『15の歌集 ハジマリとヲハリ』 開催中

15の歌集 ハジマリとヲハリ

① 集を題して一冊に収める歌集を「歌集」といいます。その歌集の巻頭歌と巻末歌を「巻頭歌」と「巻末歌」といいます。牧水先生は、その巻頭歌と巻末歌を「巻頭歌」と「巻末歌」といいます。牧水先生は、その巻頭歌と巻末歌を「巻頭歌」と「巻末歌」といいます。



今年度最初の企画展が始まりました。牧水が発表した15冊の歌集の巻頭歌と巻末歌に焦点を当てました。伊藤一彦館長は次のように書いています。

歌人が歌集を編むときにまず考えるのは、全体の構成である。何をテーマとし、そのテーマをどのように展開するかに意を用いる。ほぼ選歌も終ったところで、巻頭歌をどの一首にするかに思いをめぐらす。(略)
若山牧水も巻頭歌は、その一卷を象徴する秀歌を選んでいく。優れた歌人の一卷は、巻頭歌と巻末歌の二首を読むだけで全体の内容を想像することができるのである。(略)

15歌集の巻頭歌と巻末歌がずらり並びました。あわせて、全15歌集も展示しています。どうぞ文学館へ足をお運びください。

期 間 9月29日（日）まで ※休館日にご注意ください
会 場 若山牧水記念文学館企画展示室 お待ちしています。